

14 小細胞肺癌における外科治療の有用性の検討

本野 望・吉谷 克雄・大和 靖
小池 輝明

県立がんセンター新潟病院呼吸器外科

小細胞肺癌は化学療法に対する感受性は高いが、高率な局所再発のため予後不良な疾患である。今回、当院における小細胞肺癌に対する局所療法としての外科治療の有用性について検討した。

1991年1月から2005年12月までに当施設で小細胞肺癌と診断された58例を対象とした。男性51例、女性7例。年齢は20から82歳(平均64.8歳)。術式は肺全摘3例、肺葉切除40例、縮小手術12例(区域切除3例、部分切除9例)、試験開胸3例であった。

5年生存率は全体で54.8%、病期別にみるとcⅠ期61.7%、cⅡ期42.9%、cⅢ期33.3%であるが、p0期0%、pⅠ期63.2%、pⅡ期50.0%、pⅢ期36.4%、pⅣ期0%であった。再発は28例に認め、脳転移6例、肝転移6例、骨転移2例、肺転移7例、縦隔リンパ節転移3例、小腸転移1例、局所再発3例であった。

Ⅰ期に限らずⅡ期およびⅢ期の小細胞肺癌においても、集学的治療により良好な成績を得た。さらに局所コントロールに関して手術療法の有効性が示唆された。

15 大腿筋(縫工筋)に転移した胃癌の1例

池端 寛子・河内 保之・辰田久美子
羽入 隆晃・小川 洋・牧野 成人
西村 淳・新国 恵也

長岡中央総合病院外科

胃癌の骨格筋転移は稀である。われわれは大腿筋(縫工筋)に転移した胃癌の1例を経験したので報告する。

症例は60歳代の女性、2005年9月進行胃癌に対して胃全摘術を行った。局在MLUD、14cm、3型、低分化腺癌、pT3pN2H0P1CY1M0進行度Ⅳであった。術後はS-1内服で化学療法を行った。2006年4月右大腿部に有通性の腫瘤を自覚した。MRIなどで大腿部縫工筋内に腫瘍を認めた。針生

検で腺癌が疑われた。同年7月縫工筋切除を行った。病理は4.5×2cmの低分化腺癌であり、胃癌の転移と考えられた。その後は少量CDDP併用でS-1内服で化学療法を行った。転移巣切除後およそ2年経過したが、局所を含め再発なく、外来通院中である。

胃癌の骨格筋転移は医学中央雑誌で検索した範囲ではおよそ17例の報告がある。転移巣の切除は3例のみ行われていた。予後は不良で平均生存期間は5.6ヶ月であった。

16 胃癌術後補助化学療法不応再発症例に対する化学療法の検討

藪崎 裕・梨本 篤・中川 悟
田中 乙雄・土屋 嘉昭・佐藤 信昭
瀧井 康公・野村 達也・神林智寿子

県立がんセンター新潟病院外科

【目的】

当科における術後補助化学療法不応再発例に対する二次化学療法以降の治療法を検討した。

【対象と方法】

00年から05年のf StageⅡ、Ⅲ、Ⅳ、術後補助化学療法を施行し再発を認めた90例。男性60例、年齢35～85(63)歳。

【結果】

1. 再発後二次治療はFU/Taxane/CPT/他: 29/23/12/26例。

2. 奏効率, TTF中央値, MSTはFU(24%, 98日, 615日), Taxane(17%, 105日, 437日), CPT(8%, 61日, 290日)でFUの遠隔成績は良好(P=0.01)。

3. 二次治療以降のMSTはFU610日, Taxane437日, CPT290日, Taxane+CPT833日, CPTが不良。二次治療以降に2剤以上使用例は1剤使用例より遠隔成績は良好(p<0.05)。

【結語】

1. 二次治療の遠隔成績はFUが良好であった。
2. 二次治療以降の遠隔成績はCPTが不良で、多剤使用例は単剤より良好であった。